

土門剛

土門 剛 どもん たけし



【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

改革サボタージュに、 統計の誤りが米不足を加速する

競争入札になった。回転備蓄制度の後半にも競争入札はあったが、応札そのものが少なく、本格的なものとしては今回が初めて。従って、過去の入札との比較は難しい。倍率から判断すると、作況指数74の平成5年（93年）の大凶作には及ばないが、今後の天候次第では、同90の平成15年（03年）に匹敵するぐらいの不作になることを想定しての入札ぶりという印象を受けた」

質問「何が原因か」

土門「やはり11年産が穫れていなかったことだ」

質問「作況指数は101で平年作以上だったが」

土門「その作況指数が間違っているのだ」

質問「またか」

土門「統計部は、間違った数字ばかりを垂れ流してきた。省内でも批判は相対的に強く、幹部でも2ポイントぐらい差し引いたものが、実態だという見方をしている。11年産なら、実質99だ。これでも甘すぎる。筆者はマイナス4ポイントとみている。

11年産なら、97ではないかと思っていたが、早くから業者が産地めぐりをしていたという事実、さらに政府備蓄米の入札結果、これらを見ると、もう少し下かもしれない。現にコメ検査をやっている知り合いの生産者（秋田）は、『屑米が目立ち95であっても不思議ではない』と話している」

質問「統計部は、篩いの編み目が違うので、数字が違っても当たり前と弁解しているが」

土門「作況指数に使う篩いの編み目は1・7mmを使っている。流通現場のライスグレーダーは1・9mmが主流と聞いている。前者の割合が多ければ、収量は多くなり、逆に後者が多ければ、収量は少なくなる。もし編み目の違いが理由というのなら、その比率が一つのポイントとなる。統計部の調査では、1・7mm台で篩っているのは、11年産でわずか3・2%しかない。1・8mm台が63・9%、1・9mm以上は32・9%だ。昔は1・7mm台が一般的だったが、販売競争が激しくなったのでライスグレーダーの編み目を拡げて整粒歩合

この出来秋は、積年の米行政の矛盾というか、改革を怠ってきたツケが一挙に回ってきそうな予感がする。6月28日に実施された政府備蓄米の入札結果が、その前触れのように思えた。

言い訳にならぬ弁解

質問「入札結果をどう見たか」

土門「2010年産の古米ですら1万3992円だったのは驚いた。12年産の新米より高い価格だ。これがすべてを象徴している」

質問「東日本大震災による倉庫で被災したコメ2万tと、放射能で被災したコメ2万tの特別隔離に伴う、

合計4万tを代替供給するため『特例措置』として実施した、と農水省は説明しているが」

土門「確かにその通りだ。だがマーケットはそんな受け止め方をしていない。今回の入札結果を需給の先行指標的な意味にとらえている。不足は、何も低価格米だけではないのだ。標準クラスのコメも足りないのだ。コメ不足はちょっとパニックぶりだ。2月、3月の農閑期に卸が出来秋のコメを確保するため、産地をかげずり回っているとみるべきだ」

質問「応札倍率は4・4倍でしたね」

土門「政府米の入札制度は11年4月に回転備蓄から棚上げ備蓄に変わり

を上げる方向になった」

質問「それにしても不思議だね。いままもなぜ1・7mmの編み目を使うのか」

土門「統計の連続性と答えてくるのかしれないが、彼らの統計は、重要と思われる農家の家計調査を例にとっても、基準を変更したりして、決して『連続性』を重要視しているとは思えない。流通実態が変わっても1・7mmの編み目を使い続けているのは、現場の実態を見ようともしない怠慢の成せる技ではないかな。利用者の視点に立った統計情報ということなら、まず1・9mmの編み目で調査すべきで、連続性を重視するなら補正係数を示しておけばよいが、それもしていない。統計部の連中は、国民が統計を使うということを考えていないのではないか」

ピークアウトの「メ」供給力

質問「11年産不作の原因は何だったか」

土門「2つある。一つは、天候要因。もう一つは構造的要因。前者はあらためて説明の要はあるまい。昨年も低温になったり、高温になったり、あるいは台風がやってきたり、気象は目まぐるしかった。今年も同じような天気が続いているのに、それを克服する農家の技術がない」

質問「構造的要因とは何か」

土門「農家の高齢化や後継者不足で供給力が落ちていることだ。さらに長年の低米価で生産意欲をなくしている。普及組織や農協の技術指導力も目を覆うような惨状だ。政策的な失敗もある」

質問「何のことか」

土門「集落営農組織のことだ。旧ソ連のソフホーズやコルホーズ、かつての中国で見られた人民公社のような、生産者個人の意思を尊重しない集団組織だと、農家はとたんに意欲をなくす。農水省が反省すべき点は、新しい政策を打ち出しても、マーケットに耐えうるような競争力評価をしてこなかったことだ。農水省は、認定農業者や集落営農組織の数値目標だけを掲げ、それらが生産力にどう影響しているか、調査したことはないように思う。これは農政の致命的欠陥だ」

質問「農家の技術低下はそんなに深刻か」

土門「零細兼業農、大規模農いずれも技術低下は深刻だ。まだ零細兼業農の方に、昔の篤農家のようなこだわりの技術を持っていることがある。逆に大規模農は、面積に振り回されて、土づくりや施肥の基本がなっていないことも少なくない。そんなことよりも補助金のが最

大の関心事みたいだ」

質問「どんな技術が必要か」

土門「技術に素人なので、難しいことは言えないが、腕の良い生産者かどうかを見極めるのに、とりあえず有用微生物を扱えるかどうかを判断材料にしている。昨今のような異常気象が続く中では、有用微生物をきちんと使いこなせる生産者だけがリスクを極力少なくできると思うからだ。良い生産者は、有用微生物に興味を示し、悪い生産者は補助金ばかりに目がいくというように説明している。大規模生産者の中には、『規模拡大すればするほど有用微生物の利用は欠かせない。省力化に役立つ』と言いつける者もいるほどだ」

質問「耕作面積が増えたり、野菜などの複合経営をすれば、単収が落ちていくという事例も聞かれるが」

土門「一般的に面積が増えれば単収は下がる傾向にある。農作業に手が回らないからだ。中途半端な複合経営も同じだ」

質問「集落営農組織はどうか」

土門「論外だ。そもそも組織の担い手層は、60歳代が多い。しかも1、2haの零細規模しかやってこなかった。高齢者なので大型農機も満足に扱えない。力仕事にも限界がある。そんな農家を担い手層とおだて上げ、彼らに地域の農業生産を担わせ

るのは、常識では考えられないことだ。これが生産力を落としていることに農水省は気付くことだ」

質問「10a当たりの年平均収量が統計部の調査では落ちていない」

土門「この年平均収量がそぐくせ者だ。その前に年平均収量について説明しておきたい。農水省のホームページには、年平均収量とは、『水稻の栽培を開始する以前に、その年の気象の推移や被害の発生状況等を年平均並みとみなし、最近の栽培技術の進歩の度合や作付変動等を考慮し、実収量のすう勢を基にして作成されたその年に予想される10a当たり収量をいい、作柄の良否を表す作況指数の基準となつています』という解説がある。これは戸別所得補償制度における交付金単価の算定や、農作物共済事業（農業共済）における共済基準単収の算定に使われる重要な数字で、これに作況指数をかけ合わせたのが実際の生産量になるのだ」

質問「年平均収量のどこが問題か」

土門「まず、誰がそれを決めるかだ。統計部に設置された『水稻の作柄に関する委員会』で決めているが、委員の人选に問題がある。その委員長簿をチェックしてみたら、マーケットとはまったく無縁の学者や外郭団体に所属する農水省OBなどがメンバーだ。田圃のこと、農家の技術レ

土門 辛聞

質問「『水稻の作柄に関する委員会』は、何か意図があつて、そんな数字を出してくるのか」
土門「何もなし」

ベル、実際の作付け状況など現場のことを熟知しているとは到底思えない。そのためなのか、平年収量にほとんど動きがない。08年産から12年産までの5年間、ずっと530kgと同じ数字が並んでいる。その前2年（06年と07年）は529kgだ。およそ生産現場を歩いたことがない者が何の根拠もなく積み上げた数字だ」
質問「あり得ないね」

土門「農水省の解説では、『最近の栽培技術の進歩』とあるが、その間に、いったいどんな技術進歩があつたのか、逆に聞いてみたいよ。委員の方々は、岩手の集落営農組織の圃場を視察してみるべきだ。平年収量は確実に落ちていくというのが、マーケットのプロの見方だ」

質問「これに作況指数をかけ合わせたのが実際の生産量だね」
土門「そうだ。ところが平年収量と作況指数のダブルで間違ふから、生産量は実態とはかけ離れた数字になつてしまう。今の米不足はこれによつて生じているというのが、筆者の見方だ」

質問「『水稻の作柄に関する委員会』

そんな芸当ができるような面々ではないからだ。統計部が出してきた資料を読んでみるだけではないかな。意図があるとするれば役所の方か。あるいはダメ農家を保護したい政治の方かもしれない。戸別所得補償の変動部分を高めに出そうとするれば、平年収量も高めに設定することになる。農業共済も、同じように高めにしておけば、補償金の算定で農家に有利になる。政治的に決められているようだな」

生産者に選択の自由を

質問「この出来秋に、米政策の矛盾が一挙に表面化すると主張、もっと詳しく説明してもらいたい」

土門「12年産も状況は同じ。気象も決してよいとは思えない。関東や東北の太平洋がヤマセ（オホーツクからの偏東風で冷害をもたらす）の影響が出てきたと聞く。春の播種・育苗の時期には、爆弾低気圧が日本海側を吹き抜けた。育苗ハウス倒壊などの被害が各地で出た。田植えの時期を遅らせるなど不作要因となる。実質ベースの作況指数が90台前半ということも十分にあり得る。もしそうなれば一大事だ」

質問「米価の高騰か」
土門「デフレ下での米価の高騰。考えるだけでも恐ろしいことだ。だが

価格は需給で決まる。不作になれば高騰する。コメも、この経済のメカニズムから免れることはできない」
質問「高騰すれば、政府備蓄米を放出すればよいではないか」
土門「ところが、それができなくなつたのだ。以前なら、米価が高騰すれば、政府在庫米の放出で冷やしたり、逆に米価が下がると、政府が緊急買い上げして価格を維持することができた。棚上げ備蓄を取り入れた政府が市場介入を御法度にしてしまつたのだ」

質問「高騰に打つ手はほかにあるか」
土門「ないと思う。ただスーパーなど買い手サイドが、バイイング・パワーを発揮して価格引き下げの圧力をかけてくることぐらいかな。輸入に期待しても、現行制度では年間輸入量は決まっているので価格を冷やす決定打にはならない。いくらスーパーでも、ないものには勝てず、米価の高騰に歯止めがかからず、消費者の不満が農政に向かう事態だつて十分にあり得る」

質問「統計部のせいだけではすませられないね」
土門「そうだよ。統計にだけ問題があるのではなく、改革の遅れにこそ問題があるのではないか。出口の流通を完全に自由化しておきながら、

入口の生産をそれに沿つた体制に改

革していないことに大きな原因がある。とくに生産調整は何の改革もなされてない。農水省が必要予測をして、それに沿つて生産数量目標を立てて、都道府県に配分する仕組みはすでに破綻したとみるべきだ」
質問「どうすればいいか」

土門「出口を完全にフリーにしたのなら、入口もそれに沿つてフリーにすればいい。何も減反制度そのものをなくせと言っているのではない。先物市場を整備した上での選択減反制度の完全実施だ。その前にやる必要がある。生産者の選択の自由を奪うような仕組みを徹底排除することだ。生産調整に参加するかどうかは、行政が介入することではなく、市場の判断に任せることしかない。米政策の改革は、ここから始まる」

質問「農水省は、02年に策定した米政策改革大綱で、そのようなことを主張していたね」

土門「しかも10年に完全実施すると、のロードマップまで作っていたよ。とくに生産調整についての約束は反古にされてしまったままだ。その天罰といったら言い過ぎかもしれないが、この出来秋に、米価高騰という形で農水省が世論の強い批判を受けるとなつたら、あまりにも皮肉的すぎる」

質問「ありがとうございます」